

# 須恵村訪問記

前川 亨

## 1. 訪問のきっかけ

私が初めて須恵村（熊本県球磨郡）——今日では町村合併のためにその名は残念ながら地図から消えてしまった——とそこを調査したジョン・F・エンブリーの名を知ったのはルー・F・ベネディクト『菊と刀』（Ruth F. Benedict, *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*. 1946. 長谷川松治訳、社会評論社 1948年 [のち講談社学術文庫 2005年] / 越智敏之・越智道雄訳、平凡社ライブラリー 2013年) における引用を通してであった。それ以来、エンブリーと須恵村の名は常に気にかかっていた<sup>1)</sup>。1930年代、社会人類学の研究において農村社会への関心が高まり、それが東アジア地域を対象とする研究にも及び、ほぼ時期を同じくして中国に関しては費孝通『中国の農民生活』（Fei Hsiao-tung, *Peasant Life in China: A Field Study of Country Life in the Yangtze Valley*. 1939. 仙波泰雄・塩谷安夫訳、生活社 1939年)、そして日本に関してはエンブリー『須恵村』（John F. Embree, *Suye Mura: A Japanese Village*. 1939. 植村元覚訳、日本経済評論社 1977年 [初版は関書院 1955年]）という名著となって結実したのは興味深い<sup>2)</sup>。牛島盛光『写真民族誌 須恵村 1935～1985』（日本経済評論社 1988年。以下、『写真民族誌 須恵村』という。）は、エンブリーの撮影した写真をふんだんに用いつつ、須恵村の「その後」を追跡調査した成果として貴重である。（牛島教授の須恵村調査の成果には、『変貌する須恵村——社会文化変化の基礎的研究』ミネルヴァ書房 1971年、もある。）私はエンブリーが写真に記録したその「学術的名所」（『写真民族誌 須恵村』1頁）を是非訪ねてみたいと切望していたが、なかなかその機会を得られなかった。

2014年度、専修大学の教養ゼミナールにおいて、私はベネディクト『菊と刀』を講読することとなった。この機会に私はゼミ合宿のかたちで須恵村を訪問することを思い立った。奇しくも、翌2015年はエンブリーが須恵村を調査して80年目の節目の年に当たる。私はぜひこの機会を活かしたいと考えたのである。ただ、私は社会人類学的調査に関する

専門的な訓練を受けておらず、また予備的な調査を行う時間的余裕もなかった。訪問する期間も夏季休暇中のせいぜい二、三日しか取ることができない。これら様々な制約からして、本格的な調査を実施することは最初から断念せざるを得なかった。このような限界は否めないものの、現地を訪問し、自分の足で歩いてみて、その土地の雰囲気、自然環境を直に感じ取り、地元の方々とお話をする機会を得られたのは幸いであった。

本稿は「調査報告」を自称し得るものではない。しかし、「論文」や「報告」というかたちは取れないにせよ、今回の訪問を何らかのかたちで記録には留めておきたい、また、このような記録はこれからあさぎり町、旧須恵村を訪れる人の参考にはなるに違いないと考えて、本稿を草することとした。後にも触れるように、旧須恵村に長期間滞在して参与観察を続けてこられた研究者がおられるということなので、本格的な研究成果は、その方の著書・論文の公刊を待ちたい。

## 2. 調査の目標

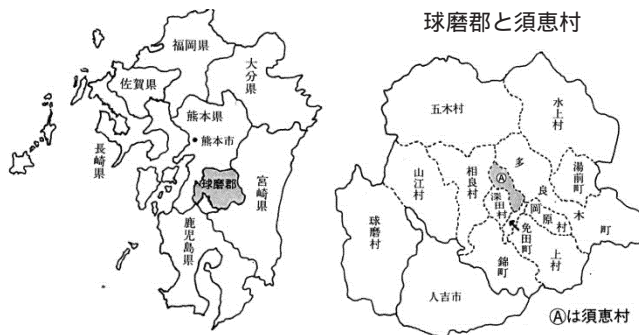
エンブリー『須恵村』と、エンブリー夫人（エラ=L=ウィズウェル）の調査ノート（ロバート=J=スミス教授が編集して公刊した『須恵村の女たち』（Robert J. Smith, Ella Lury Wiswell, *The Women of Suye-mura 1935-36*. 1982. 河村望・斎藤尚文訳、御茶の水書房 1987年））には、エンブリー夫妻が撮影した今から約80年前の写真がそれぞれ数十枚収められている。後に牛島教授は、所蔵先のコーネル大学において写真資料の現物を閲覧したうえで、その中から161枚を厳選し、更に1950年代に開始した追跡調査の中で教授自身が撮影した写真をも併せて『写真民族誌 須恵村』に纏めた。私は、それらの写真が撮影された現場が今どのようになっているのか、手がかりのあるものについてそれを確認し、「須恵村の今」を写真に収めることを企画した。エンブリー夫妻が須恵村における調査の過程で、その当時の様子を多くの写真に記録したのが1935~36年であり、牛島教授による戦後の追跡調査の下限がそれから約50年後の1980年代半ばであるから、今回私たちが目にするのは、エンブリーの調査からは80年後、牛島教授の追跡調査からでも約30~60年が経過した後の須恵村の姿ということになる。私たちはそこに、1世紀近くにも渉る須恵村の変貌の歴史の一端を写し取ることができるであろう。

あさぎり町商工観光課の中神啓介さんに問い合わせたところ、中神さんは、エンブリー撮影の写真資料の現物が現在、あさぎり町教育委員会に保管されているとの重要な情報を

## 須恵村訪問記

寄せて下さり、併せて教育委員会の主幹として文化財管理を担当しておられる北川賢次郎さんを紹介して下さいました。エンブリーが撮影した1700枚にも及ぶ写真が存在すること、『須恵村』などに掲載されたのはその極めて僅かな一部に過ぎないことは、『写真民族誌 須恵村』に付された口バート＝J＝スミス教授の文章（「コーネル大学・エンブリー資料について」）によって知っていたが、迂闊にもその資料はスミス教授の文章にあるとおり今でもコーネル大学に所蔵されているものばかり思っていた私には、この情報は驚きであった。早速、北川さんにご連絡したところ、北川さんからは、この写真資料の閲覧についてご快諾を頂いた。全く思いがけないことに、私はエンブリー撮影の写真の現物を自分の眼で見ることが出来ることとなったのである。この写真資料の閲覧も今回の調査活動の一つの柱となった。

ここで、旧須恵村の位置を示す簡略な地図を予め掲げておこう。



[出典：『写真民族誌 須恵村』 vi 頁]

2003年、須恵村、深田村、免田町、上村、岡原村が合併してあさぎり町となった。

### 3. 旅程

[9月2日]

博多 [九州新幹線] 新八代 [鹿児島本線] 八代 [肥薩線] 人吉 [くま川鉄道 (旧 JR 湯前線)] あさぎり (旧免田駅) 駅前のビジネスホテル肥前屋に宿泊。

博多からあさぎり町までの所要時間は約4時間半であった。九州新幹線の開通により、博多から八代までの所要時間は大幅に短縮されて非常に便利になった。しかし、八代では肥薩線への乗り換えで80分もの待ち合わせ時間があった。80年前、エンブリーが須恵村に入った時も八代で長時間の待ち合わせを経験したらしい。「八代は、熊本の南二時間の

小都市である。ここで列車を乗りかえ、人吉行き列車に一時間待ちあわせる。……八代における不便な待合せは、人吉への二時間の旅の豪華な景色で補われない」（『須恵村』25頁 [以下、本稿における引用は全て既訳による。ただし訳文を大幅に改めた場合がある。]）。些か退屈でウンザリしているエンブリーの様子が窺われる記述であるが、私自身は静かな駅舎でのんびりした待ち合わせをさほど苦痛には感じなかったし、「人吉への二時間の旅」（今回の所要時間は約1時間半）での「豪華な景色」は、その待ち合わせの不便さを補って余りあるものに思われた。「列車はこの地方の深い峡谷をなしている球磨川のふちにそって走る。……ときどき列車は、峡谷の起伏の多い側と逆巻く激流のあいだに危かしく位置する小さな部落を通る」（同書25～26頁）というエンブリーの記述そのままの景色が車窓に広がっていた。

なお、学生たちは東京（羽田）から空路で鹿児島に入り、そこから高速バスで人吉インターチェンジまで移動、更にバスやタクシーを乗り継いであさぎり町に到着した。エンブリー夫人が須恵村を戦後に再訪した時には、こちらのルートが使われた。移動の効率としては、断然、こちらの方がよい。しかし、私には肥薩線の車窓風景は捨てがたいものと思われた。

私たちが宿泊したビジネスホテル肥前屋は、あさぎり駅を降りてすぐの場所にある。2013年に改築されたばかりなので真新しく綺麗な建物であるが、もともと1935（昭和10）年創業の老舗旅館である。1935年とは、まさにエンブリーが須恵村の調査に入った記念すべき年に他ならない。

写真1は創業当時の肥前屋旅館の前景。免田駅を降り立った若き日のエンブリー夫妻は創業間もないこの旅館の前を通過して須恵村へと向かい、以後、何度もここを往来したに違いない。写真2は現在のビジネスホテル肥前屋の前景。前に立っているのはゼミ生諸君。写真3も同じく肥前屋の前で。右は若女将の沼田理恵さん（彼女で四代目となる）、左は翌々日タクシーを運転し、ガイドを務めて下さった蓑田和彦さん（若女将の叔父さんに当たられる）。

チェックイン後、あさぎり駅周辺を散歩。翌日訪れる予定の教育委員会（旧免田中学校）を下見。

[9月3日]

雨模様のあいにくの天候の中、午前9時に肥前屋を出発。くま川鉄道で一駅人吉寄りのおかどめ幸福駅に移動。駅前の売店で自転車を借りる。（あさぎり駅にもレンタサイクル





写真1 創業当時の肥前屋旅館  
(沼田理恵さんご提供)



写真2



写真3

はあるものの、台数が限られている。) 自転車であさぎり町に戻り、一路、旧須恵村へと向かう。10時半頃に旧須恵村に入る。その中心部の旧須恵役場の辺りでエンブリーの住居跡を探していたところ、初老の婦人から声をかけられた。この老婦人は、愛甲慶寿家<sup>けいすけ</sup>氏——エンブリーの調査に協力を惜しまず、「日本の最良の友人」という呼称と共にその著

書『須恵村』を捧げられた人——の縁者であった。彼女はエンブリー住居跡を私たちに丁寧に教えて下さり、短い時間ではあったが私は彼女が聞いた慶寿家氏の思い出話を伺うことができた。彼女が教えて下さったとおり、そこから僅か数十メートル先に、「エンブリー博士住居跡地」の碑は見出された。現在ではエンブリーの住居は残念ながら取り壊され、無粋なガソリンスタンドに変わってしまっており、往時を偲ばせるものは何もなかった。



写真 4

お昼に免田に戻り、午後 1 時から約 2 時間にわたって、あさぎり町教育委員会生涯学習センター（旧免田中学校）にて念願のエンブリー撮影の写真資料を閲覧。保存されている写真はいずれも、それが 80 年前のものであることを忘れてしまうほどに鮮明であった。牛島『写真民族誌 須恵村』の凡例（viii 頁）には「退色が相当進んでいるものもある」とされていたので、保存状態は劣悪なのではないかと想像していたのであるが、この想像は全く外れた。写真資料の保存技術の進歩と保存者の努力の賜物に違いない<sup>3)</sup>。解説を下さった北川さんのお話によれば、エンブリーは写真一枚一枚にキャプションを付けており、被写体となった人物はいずれも同定可能であるという。（今回閲覧したのは写真のみ。）エンブリーが僅か 1 年余りの滞在でかくも多くの写真を残したということ自体、驚異的に思える。また、それらの一つ一つにキャプションを付したところにエンブリーの真摯な人柄が偲ばれると共に、エンブリー夫妻と村民との細やかな交流も偲ばれる。（もっとも、北川さんのお話によれば、エンブリー夫妻も最初から村民と打ち解けていたわけではなく、夫妻と地元の支援者の努力によって次第に村民たちも心を開いていったようである。地元の支援者としては、先に名前を出た愛甲慶寿家氏や当時村長を務めていた守永留吉氏、それにエンブリーの通訳を務めた佐野敏夫氏の名前を逸することができない。北川さんは中

でも特に佐野氏の果たした役割の大きさを強調しておられた<sup>4)</sup>。) ビデオテープの存在しなかった当時において、写真撮影はその時代の、その地域の様子を視覚的に記録する殆ど唯一の有効な手段であった。スミス教授は先に引用した文章の中で、エンブリーの残した資料を「タイム・キャプセル」と呼んでいるが (iv 頁)、私たちもまた、その当時にタイムスリップしたかのような不思議な錯覚に襲われた。

資料の中には、強く印象に残るものが何枚もあったが、ここでは一つだけ紹介しておこう。それは、当時の村長の息子と思しき若者と子供、それにエンブリー夫人の三人が写っている一枚である。エンブリー夫人は下駄を履いているが、履き慣れないからか、それとも下駄が小さすぎるからか、彼女の足が下駄からはみ出してしまっている。おそらくかなり痛かったに違いない。しかし、夫人は優しく子供に何事かを話しかけており、その後方に立っている村長の息子らしい若者もにこやかにほほ笑んでいる。いかにもほのぼのとした雰囲気を醸し出している一枚であった。

心残りなのは、資料の量が余りにも多くて、その全てを丹念に閲覧する時間的余裕がなかったことだ。北川さんによれば、これらの資料を全て整理・分類してデータベース化する予定であるとのこと。あれほどの量の資料を整理するのは大変な時間と労力を要する作業であろうが、その完成を楽しみに待ちたい。また、北川さんはじめ複数の方から、数年にわたって旧須恵村に居住して参与観察を続けた研究者がつい最近、その期間を終えて旧須恵村を離れられたとの情報を得た。これ以外にも須恵村とエンブリーに関心を寄せている研究者がおられ、写真資料も閲覧されたそうであるから、そうした方々の手によって、エンブリーの業績の全体像が明らかにされていくことが期待される。

午後3時を回った頃に漸く私たちは生涯学習センターを退出することとした。この頃から天候はいよいよ悪化し、時折雷を伴って激しい雨が降るようになったので、午後の予定は全て取りやめにした。翌日はタクシーを借りることに決め、あさぎり駅近くの中央交通タクシーに予約を入れた。おかげで幸福駅で自転車を返却した午後4時過ぎが雨と雷のピークで、くま川鉄道も運行を見合わせたため、全く動きがとれない状態となり、やむなく売店の店先で雨宿りをして、天候の回復を待つこと40分以上、くま川鉄道はかなり長時間にわたって不通のようだったので、あさぎり駅までは歩いて戻る他はなかった。結局、宿に帰り着いたのは6時近くであった。

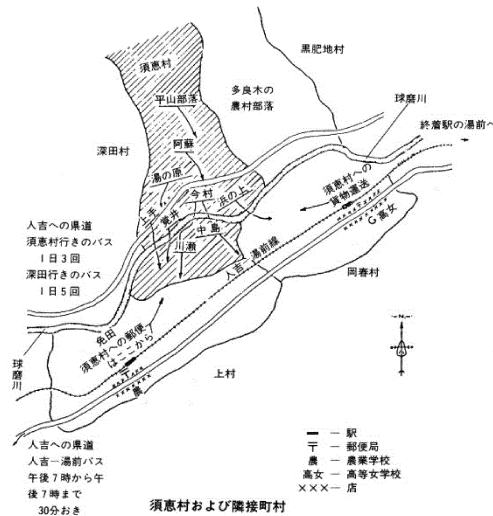
[9月4日]

この日の午前中は天候が極めて悪く、出掛けたとしても、あの雨と雷ではせいぜいタク

シーの中から観察するくらいのことしかできない状態だったので、午前中の予定はキャンセルにせざるを得なかった。

漸く雨が峠を越えた午後0時、中央交通タクシーで旧須恵村へと向かう。運転を担当して下さったのは蓑田和彦さん。蓑田さんは地元の方で、当然ながら地理に詳しく、現地の風俗習慣などにも精通しておられたので、まさに最高のガイドを私たちは得たことになる。蓑田さんはまず私たちを須恵文化センターに案内して下さいました。そこにはエンブリー博士展示室のスペースが設けられ、エンブリー夫妻が撮影した写真の一部が展示されていた。

その後、私たちは、エンブリー夫妻と牛島教授が写真を撮影した場所を可能な限り確認するべく、覚井地区 今村地区 <sup>とんところ</sup> 頓所地区 <sup>おあで</sup> 上手地区 川瀬地区<sup>5)</sup>を回った。更に蓑田さんは阿蘇地区の釈迦堂、上村の谷水薬師へも案内して下さいました。各地区の位置関係は次の略図のとおりである。この略図では頓所地区が載っていないが、頓所(屯所とも書かれる)は今村地区の北、阿蘇地区との中間に位置する。



[出典：『須恵村の女たち』26頁<sup>6)</sup>]

最後に私たちは旧免田駅付近に戻り、何枚かの写真の同定を行なった。これらの調査の結果については、節を改めて述べることにする。

この一連の調査は午後4時で終了した。

[9月5日]

午前9時に宿をチェックアウトし、帰路につく。くま川鉄道、高速バスを乗り継ぎ、鹿児島空港から空路、羽田へ。羽田着は午後4時40分頃であった。

#### 4. 調査の成果

ここでは、牛島盛光『写真民族誌 須恵村』に掲載された写真が撮影された場所として今回同定できた現場の写真を紹介し、併せて若干の補足写真を紹介する。『写真民族誌 須恵村』の写真を、同書の順序に従って配列し、例えば同書で番号1が振られているものはU1、番号6が振られているものはU6のように略記する。(1935~36年に撮影された写真はエンブリーによるもの、それ以外は牛島教授が撮影したものである。)写真の標題は『写真民族誌 須恵村』による。(ただし、一部省略。)それらの写真の後に、それらと対応する今回私が撮影した現場の写真を「写真5」などと表記して掲げる。写真の後は簡単な解説を付ける。「……とのこと」「……らしい」「……という」のような表現で解説した場合の根拠は地元の方々からの聴取であるが、ここでは個人が特定されないようにしておく。



U1 [須恵村への道、川瀬、1935]



写真5

『写真民族誌 須恵村』では、このU1の写真が第一枚目に掲げられていて、非常に強い印象を与えている。この道の奥が、球磨川にかかる川瀬橋であり、それを渡ると覚井地区になる。橋のたもとに、U206・写真21の庚申塔がある。



U6 [覚井、村の中心、1951]



U7 [同じ場所、1985]



写真 6

これらの写真で見る限り、少なくとも住宅地の「ハード面」に関しては、1950年代から1980年代への変化の方が、1980年代から2010年代への変化より大きかったように見える。この道の先にエンブリー住居跡の碑（写真4）がある。





U10 [免田村の商店街、1936]



U11 [同じ場所、1985]



写真7

あさぎり駅（旧免田駅）のすぐ前の交差点付近で撮影。駅前のように人の往来の激しいところでは、1980年代以降の30年間における変化が極めて大きいことが分かる。写真左手に私たちが宿泊した肥前屋がある。



U33 [家族単位のヨケマン、1985]



写真 8

この田園風景は 30 年前とはほとんど変わっていない。「ヨケマン」は「おやつ」という意味で、現在でも使われる語だとのこと。

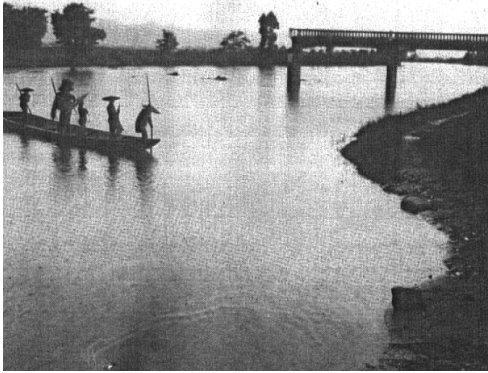


U43 [免田駅に集荷された米俵、1936]



写真 9

現在、A コープなかまになっている辺りが米の集荷場であったと思われる。右があさぎり駅（旧免田駅）の駅舎。駅の場所は以前から変わっていないという。肥前屋の部屋の窓から撮影。



U88 [川瀬・覚井の渡し、1936]



写真 10

川瀬橋を覚井側から撮影。U88をエンブリーが撮影した地点は写真10の地点よりも少し左後方であろう。川瀬橋は、洪水で毎年のように流されたという。エンブリーによれば、当時の川瀬橋は釘を用いず、「材木や竹や強いつるを集めて」造られた（『須恵村』113頁）。彼が撮影した別の写真によっても、当時の橋がかなり粗末なものであったことが窺われる。しかし、毎年のように橋の建て替えを行なうことには、その協同作業を通して部落の結束を強めるという別の目的もあったとエンブリーはいう。「橋は毎年のように流され、部落はその都度結びつけ直される」（同書114頁）。



U89 [自転車屋、1955]



U90 [30年後、1985]



写真 11

30年前の「田山商会」の看板は現在も健在であった。ここの現在の店主の方は、エンブリー夫人が同地を再訪した際に、その歓迎会で講演を聞いたことがあると、懐かしそうに話して下さった。



U126 [火の見やぐらの建設、覚井、1936]

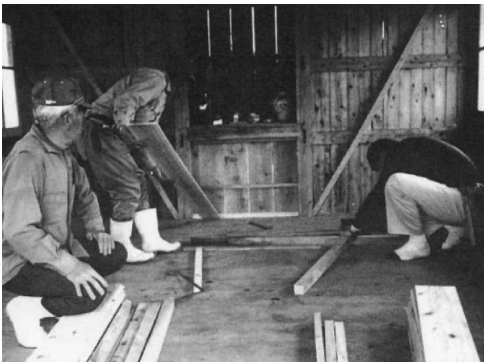


U127 [同、1985]



写真 12

エンブリー住居跡のすぐ近く。1936年当時の面影はない。1985年にはあった半鐘も既になくなっていた。現在では防災無線に取って代わられたのである。U127には、その半鐘は「エンブリー寄贈」のものだというキャプションが付けられているが(75頁)、実はそれはエンブリーが寄贈したものではなかったらしい。



U128 [地蔵堂の修理、頓所、1982]



写真 13





写真 14

頓所地藏堂の中を拝観することはできなかったので、その外観を写した写真を2枚挙げておく。旧須恵村ではしばしばこのようなお堂を目にした。(もちろん、いずれもエンブリーの調査当時のままではない。)  
「どの部落にもお堂がある。このお堂は仏像を祀る小さな木造の建て物であって、ふつうには瓦屋根、時にはとたんか、藁葺である。お堂は、集まる場所として、また、部落の子供の遊ぶ場所として、部落生活の上で重要な意味をもっている」(『須恵村』35頁、傍点は訳者)。エンブリーがお堂での様々な営みをしばしば写真に収めたのは、村落生活に占めるお堂の役割の重要性を彼が認識していたからである。『須恵村』に記述されるように様々な「講」が、こうしたお堂を集会所として、活発に催されていた(第四章「協同の諸形態」6「講」)。その「講」は現在でも部分的には残っているようである。





U137 [観音堂での彼岸茶立て、上手、1936]

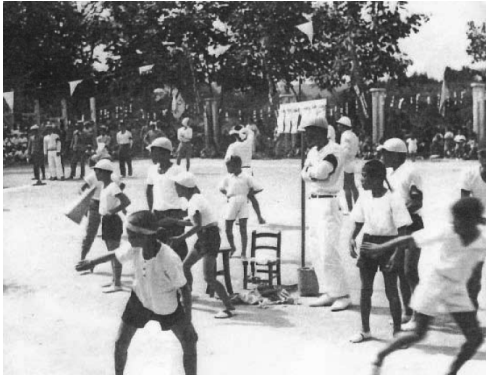


U138 [同、1976]



写真 15

旧須恵村のお堂の中でも、特に目立つのが観音堂である。安産のご利益を願う女性たちが集う観音講の様子は『須恵村の女たち』(123～124頁)に生き生きと描かれている。人吉からあさぎり町を経て湯前町までの間に相良三十三観音と呼ばれる観音像が、それぞれの質素なお堂に安置されており、毎年、決まった時期に開帳される。彼岸には観音堂で地元の人たちが集まってお茶を飲む慣習が、かつての写真そのままに今でも残っているという。我々が訪れた時には、時期はずれだったこともあってひっそりと静まり返っていたが、開帳の時期には賑わいをみせることであろう。1976年の写真に比べて、現在では、周囲の緑が深くなり、お堂の横の石碑も苔むして、40年近い年月の経過を感じさせる。



U157 [運動会、須恵小学校、1936]



写真 16

須恵小学校は、現在は移転して、写真奥の方に僅かに見える近代的な建物に改築されているが、以前はこのグラウンドが須恵小学校のグラウンドであったとのこと。右奥に見える建物は、「マインド松井須恵工場」という紡績工場になっているが、かつての小学校の建物を改築して使用しているようである。現在、このグラウンドは様々な競技に使用されているということだが、私たちが訪れた時には平日の昼間だったせいか誰一人おらず、いささか淋しい景色であった。



U162 [覚井の観音堂、1936]



写真 17



写真 18

覚井観音堂は、エンブリー住居跡のすぐそばにある。写真 18 はその外観。他の観音堂に比べるとやや大きいように感じられた。旧須恵村を歩いてみて、この地方における観音信仰の根強さを改めて私は痛感した。「災害にも見舞われず、こうやって平穩無事に生活できるのは、観音様が見守って下さっているお蔭だと自分は思っている」という地元の人の言葉が特に強く印象に残った。



U 164 [二の薬師に詣りに行く須恵村の娘達、上村、1936]



写真 19

谷水薬師は「二の薬師」の名でも知られる。旧須恵村から上村の谷水薬師までは相当な距離があることを、今回実感することができた。当時の参詣は一日がかりの行事であった。『須恵村の女たち』『薬師巡礼』（129～132 頁）は、この薬師参詣についての記述であり、彼女たちが途中立ち寄った「よく知られた」神社とは白髭神社のことであろう。「二の薬師」は深山幽谷の中ともいうべき場所にあった。私たちが訪れた時には、天候が回復して

強い日差しが照りつけ、非常に蒸し暑かったのだが、薬師の辺りはひんやりとした涼しい空気に包まれていた。薬師の更に奥にはかつての上村氏の城跡があり、山の中を散策する恰好のハイキングコースになっていて、展望も素晴らしいとのことである。U164・写真19は上村側から旧須恵村の方角を向いて撮影したもの。なお、参考までに、現在の谷水薬師の山門付近の写真を下に掲げておく。おそらくエンブリーの調査当時の佇まいを現在にまで伝えていると思われる。



写真 20



U206 [庚申塔、川瀬、1936]



写真 21

笠石を載せた印象的なこの庚申塔は、川瀬橋のたもとにある。写真の奥が球磨川、川瀬橋である。「1935年、エンブリー夫妻はこの庚申塔に迎えられて須恵村に入った。それが



ら 50 年、1985 年エンブリー夫人（再婚してウィズウェル夫人）は同じ庚申塔に迎えられて須恵村を訪ねたのであった」（『写真民族誌 須恵村』126 頁）。1936 年当時と比べて、石塔の数が減り、かつてはなかった道路がすぐ後部に作られてしまっている。須恵村を含むこの一帯は庚申信仰の盛んな土地であり、現在でも庚申待の慣習が残っているという。

参考として、阿蘇釈迦堂とその裏手に残る石塔・石碑群について触れておく。



「釈迦堂境内五輪塔・板碑群」（牛島『変貌する須恵村』より転載）



写真 22



写真 23

写真 23 は現在の釈迦堂の外観。阿蘇釈迦堂に関してエンブリーは、「阿蘇部落の釈迦堂は、現在のところ花祭りが祝われる部落唯一のお堂である。この周囲にはそののち見られない型の古い墓がなお数多く存在する」（『須恵村』196 頁）と述べている。彼の撮影した写真資料の中に、阿蘇釈迦堂を撮ったものがあるかどうかは確認していないが、エンブリーがこの釈迦堂を訪ねる機会をもったことは間違いなからう。この釈迦堂（かつての平等寺本堂）に関しては、牛島盛光『変貌する須恵村』に詳細な記述がなされている（35～57

頁)。平等寺は、創建当時は威容を誇っていたに違いないが、現在では釈迦堂がこじんまりしたかたちでひっそりと田園地帯の道路脇に建っているのみである。石塔・石碑群は、圃場整備事業の際に配置が変えられたようで、エンブリーが見た数多くの「古い墓」のままではないらしい。牛島教授は1968年、圃場整備事業が始まる直前に、自身が責任者となってこの石塔・石碑群の悉皆調査を実施して、写真撮影を行ない、またその銘文などを記録している。それによれば、最も古い石塔は15世紀にまで遡る。牛島『変貌する須恵村』から転載した写真は、その調査に際して撮影されたものであろう。その頃と現在とでは、景観は余り変わっていないようにも見えるが、石塔・石碑の傷みは確実に進んでいる。1968年には辛うじて判読できた銘文も、その多くが今では判読不可能と思われる。

## 5. 総括

今回の須恵村訪問の期間は残念ながら天候には恵まれなかった。そのため、予定をやむなく大幅に変更せざるを得なかった。9月初めは天候不順が多い時期であるから、期間の設定をもう少し工夫した方がよかったかも知れない。もっとも、当地では、今年は例年になく雨が多く、日照時間が少ないことから、稲の生育が心配だとの声を何度も耳にした。そういう点からすれば、別の時期を選んでも、天候に恵まれたかどうかは分からない。

反省すべき点としては私の準備不足を挙げるべきであろう。地図を準備し、地形や主な道路などは予め頭にいれておいた積りではあったが、実際に現地を歩いてみると、計画に無理があることが分かった。当初、私たちは二日ともレンタサイクルによって須恵村を回る予定にしていたが、想像していた以上に地域は広く、また坂も多く、自転車で回るのには困難が大きかった。自転車の使用は、実際の土地の感覚、雰囲気に直に触れることができる点では有効である（エンブリー夫妻が須恵村の各地区を調査した際の主要な移動手段も自転車であった）反面、当然ながら移動に時間を要し、悪天候に対応できない点では非効率的であった。その意味では、一日目は自転車で現地の「空気」を感じ取りながらそぞろ歩きをし、二日目はタクシーを用いて効率的に多くの地点を回る、という二つの方法を併用したのは、結果的には最も良い選択であったといえよう。

現地の方々との交流は、現地調査の醍醐味であり、今回の調査でも多くの方々のお世話になったが、もう一步踏み込んで現地の方々のご好意を「利用」させて頂けばよかったと悔やまれる。例えば、養田さんという絶好のガイドさんと一緒に回ることも開



ならず、それを十分に活かせなかったことは、大変心残りである。蓑田さんは私の無理なお願いにも、誠実に対応して下さいました。もっと無理を言って更に多くの地点を案内して頂ければ、同定できる地点も更に増えたであろう。また、折角、道端でたまたま地元の老婦人とお話をする機会を得、その際、エンブリーの調査に協力したことのある方のお宅をお聞きしたにも関わらず、そのお宅を訪問する労をとらなかった。時間に制限があったにせよ、残念であった。

しかし、これらの多くの限界はあるにせよ、総じて今回の「調査」は有意義であったと私は感じている。現地に来るのでなければ分からない多くのことを私は学んだ。

第一に、私は現地を訪れるまで、エンブリーの名がこれほど現地の多くの人々に知られているとは想像していなかった。しかも、現地の人が彼を話題にする時の、「エンブリーさん」という親しい隣人を呼ぶような口ぶりが印象的であった。多くの人の記憶にエンブリーの名はしっかりと刻み込まれていたのである。戦前におけるアメリカ人研究者の日本研究として、エンブリー『須恵村』とベネディクト『菊と刀』は双璧とあってよからうが、後者が日本文化の総体について多くの大胆な仮説を提示することによって人口に膾炙しているのに比べて、それに多大な影響を与えた前者は須恵村という一農村を対象を限った極めて地味なモノグラフであることもあって、著者エンブリーの名は一部の研究者以外には余り知られていない。そうした中で、現地におけるエンブリーの「存在感」の大きさは、実際に訪れてみなければ分からないものであった。

第二に、80年前エンブリーが体験したであろうことを追体験する、という私の当初の目標はかなりの程度まで達せられた。もちろん、80年の変化は余りにも大きい。須恵村はエンブリーがそこに立った時とは大きく違ってしまっている。しかし、そうした変化にも関わらず、現地滞在中、「エンブリーが呼吸したのと同じ空気を呼吸している」という感覚を私はずっともっていた。それは、「ハード面」が大きく変化する一方で、80年前からさほど変わらないかたちで「ソフト面」が継承されているからに違いない。そのことは、例えば多くのお堂や庚申塔などの文化財が保存され、しかもそれが単なる過去の遺物となるのではなく、現在も人々の生活の中に息づいていることにも表れている。それを内面で支えている観音信仰、庚申信仰などの強靱な持続力を、私は実感することができた。お堂や庚申塔などの文化財は、本来、人々の生活と密着したものなのであるから、実際の生活の中で継承されるのが望ましい。——もっとも、これが次の若い世代にまで継承されていくかどうかは分からない。伝統的な農村生活自体が今まさに大きく変貌しつつある。エン

ブリーがその著書の中で注目した多くの協同作業（第四章「協同の諸形態」）は、サラリーマン世帯が増加し、結婚式や葬式を自宅ではなく式場で行なう慣行が普及することによって、失われていかざるを得ない。社会生活のかかる変化は、それを営む人々の精神生活をも根本的に変えていくであろう。長く伝統として歴史的に継承されてきたものも、今や、これまでで最も大きな変化の試練を迎えつつあるのかも知れない。農村社会及びそこに生活する人々の信仰形態の持続性と社会構造の根本的な変化とがせめぎ合っているのが現状であるといえよう。

私が「ソフト面」の継承という時、それは更に感覚的なもの、すなわち現地の人々の穏やかな温かさのようなものをも意識している。私は実は現地に赴く前、果たして私たちが違和感なく受け入れてもらえるかどうか、若干の不安を抱いていた。観光地ではない土地で、一見して「よそ者」と分かる集団がむやみに写真を撮ったり「聞き込み」をしたりすると、変な目でみられたり、場合によっては不審者扱いされるのではないかと、少なくとも歓迎はされないのではないかと心配したのである。しかし、現地到着の当日から、その懸念は全く杞憂であったことが明らかとなった。今回の旅程で出会った人々は皆な例外なく、私たちを優しく温かく迎えてくれた。教育委員会の北川さんや中央交通タクシーの蓑田さんをはじめ、私たちが宿泊した肥前屋の方々、駄菓子屋の店先で出会った人懐っこい小学生たち、食堂の店員さんたち、雨宿りをする私たちに草餅をご馳走して下さったおかどめ幸福駅の売店のおばさん、偶然道端で出会った愛甲さん、田山商会の店主さん……等々、思い出せばきりが無い。こうした現地の方々の優しさや温かさは、旅行中の「異邦人」には何よりも嬉しいものである。そしてそれは、エンブリーの写真資料のそこかしこに表われているものでもあった。80年前、エンブリーも、私たちが感じたのと同じような優しさや温かさを感じ取ったに違いない。

エンブリー夫人は『須恵村の女たち』の「日本語版への序文」の末尾を、1985年に同地で開催された「須恵村調査五〇周年記念祭」に招かれた際に彼女が式典で語った言葉で結んでいる。「村は今では、前とは違ってしまいましたが、村の人びとの心の暖かさは今も同じです」（『須恵村の女たち』x頁）と。エンブリー夫人のこの訪問から更に約30年後、私たちもまた、夫人がかつて受けたのと同じ「心の暖かさ」でもって迎えられた。この「暖かさ」が、これから更に30年、50年を経ようとも、いかに社会構造が変わり世代が移り変わろうとも、変わることなく継承されていくことを、私は強く願って止まない。

註

- 1) 前川「『菊と刀』札記——*The Chrysanthemum and the Sword*と『菊と刀』の間」『専修法学論集』106(2009年)171~172頁 [エンブリー『須恵村』]において、簡単に言及したことがある。
- 2) 費孝通の著書の序文をプロニスラウ = マリノウスキーが書き、他方エンブリーの著書の序文をアルフレッド = R = ラドクリフ・ブラウンが書いているのは象徴的である。なお、エンブリーは費孝通の著書を *American Journal of Sociology* 46-2, 1940. で紹介し、また、公刊されたばかりの費孝通の著書を『須恵村』に引照している。『須恵村』の学術史上の意義については、上記ラドクリフ・ブラウンの序文及び鈴木栄太郎「社会人類学上の研究としてのエンブリー氏の『スエ村』と日本の農村社会学——*John F. Embree, Suye Mura, A Japanese Village*. Chicago : University of Chicago Press, 1939. に就て」『民族学研究』6 - 3 (1940年) 参照。鈴木論文は、複合社会を対象とする社会人類学の新しい潮流と日本の農村社会学との最初の邂逅の場面の記録としても貴重である。そこには両者の関心の共通点と相違点が明瞭に浮かび上がっている。また、米山俊直「エンブリー『須恵村』の学説史的位罫」『季刊人類学』3 - 1 (1972年) は『須恵村』を「社会人類学の発達のうちでもひとつのエポックを作っている」「人類学史上でひとつのパイオニア・ワークとしての栄光になっている」と評価している (134頁)。
- 3) 現在保管されている写真の正確な総枚数を確認しなかったが、1700枚には達していないようであるから、極端に保存状態のよくないものはコーネル大学から移管の際に省かれたのかも知れない。
- 4) この点に関しては私も全く同感である。佐野氏はエンブリーが観察に出掛ける際には必ず同伴したに違はなく、エンブリーの意思や意図を現地の人々に伝達するのに非常に大きな役割を果たしたであろう。エンブリーが撮影した写真の中には、軍服姿の人物・集団を写したものが含まれている。既に軍国主義的傾向が強まっていた状況下で、外国人がこのような写真の撮影を行ない得た背景には、佐野氏の尽力があったことが容易に想像される。
- 5) 平山地区、阿蘇地区、湯の原地区を対象から外したのは、『写真民族誌 須恵村』に掲載されている写真の数が少ないうえ、範囲としても広い「山の部落」(『須恵村』37頁)を短い時間に回ることは困難だと考えたからである。中島地区を外したのは単なる時間的な制約に過ぎない。「地区」は、現在でもそれぞれに集落を形成している。エンブリーは『須恵村』においてこうした最小単位 hamlet のことを *buraku* (部落) と呼んで重視し、例えば川瀬を「水田型部落 *paddy type buraku*」、覚井を「商店型部落 *shopkeeper type buraku*」のように類型化している (第二章「村落の構造」)。エンブリーが hamlet としての *buraku* に注目したことの意味については、ラドクリフ・ブラウンの序文や前掲鈴木論文でも指摘される。日本の農村社会における「部落」の重要性に関しては、福武直「日本農村における部落の問題」高田先生古稀祝賀論集『社会学の諸問題』有斐閣 1954年参照。福武論文は「部落」の「共同体的強制」の持続性を強調する論調で一貫しているが、福武論文から60年が経過した今日、例えば旧須恵村において「部落」の「共同体的強制」がどの程度まで持続しているかは、改めて検証されるべき問題であろう。

6) 「岡春村」は訳書の誤記。「岡原村」が正しい。なお、この略図はエンブリー『須恵村』原著 (p.20) にあるが、日本語訳では省略されている。

お世話になった現地の方々に改めて御礼申し上げたい。沼田理恵さんからは貴重な写真の提供を受けたうえ、肥前屋旅館の歴史についてもご教示頂いた。そうした方々からお話を伺うことなしには、本稿を草することはできなかった。もとより、本稿の記述に誤りがあるとすれば、その責は筆者のみに帰する。

今回の訪問は、私のゼミの合宿のかたちで実施した。参加メンバーはアイウエオ順に、木下進、塩澤春菜、野田智幸、比嘉盛一郎、堀口美保、吉田瑠璃の諸君である。特に比嘉君と堀口さんには、レンタサイクルや高速バスの予約などでお世話になった。